

◇ 国 語

国 4-1～国 4-19 まで 19 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私は女学生のころから、「本を書く」のを夢みていた。これは作家になることとちがう。

大学ノートに、一篇の物語を書き、それに挿絵を描き、表紙を画用紙でくるんで水彩絵の具で彩色した絵を描き、好みの題を、内容にふさわしくつけ、そうして麗々と、

「田辺聖子作」

と書く、そういう「本ごっこ」「著書ごっこ」が好きなのである。

(いまでもどうかすると、「著書ごっこ」をしているのではないかと、私はフト疑ってしまう——自分のことはむろんだが、ひとさまの本でも、それがあまりに麗々しい題であったりすると、「著書ごっこ」的感覚にオソわれて、気はずかしくなってしまう) 内容は、いずれも、愛読書に(無意識に)似せられている。

私は荒唐無稽(あほうむぎ)の小説を好んだから、私の「著書ごっこ」の「田辺聖子作」も、アに荒唐無稽な作品が多い。

たとえば題をみてもわかる。「古城の三姉妹」「春愁蒙古史」「白薔薇館の怪」「北京の秋の物語」……等々である。伝奇小説というべきものもかなり多い。

女学生のときにそれらをいっぱい書いて友人に回覧し、

「全十巻やから、順番まちがわんように読んでや」

(二)と悦(よろこ)に入(い)って説明(せつめい)していた。

朝も晩も、それらの本を肌身はなまらず持ちあるき、嘗めるように、自分の文章をよむ。

つづきものをたくさん書いているが、あんがい、混乱錯綜(こんらんさくそう)しないものである。一冊ずつちがうことを書き、何しろ荒唐無稽なので、筋は無責任に、いくらでもひろがるわけである。セッセと借りにきた友人たちが、ほんとうに読んでいたのかどうか、しかしずうつとあとになって私が芥川賞(あかたがわ)をもらったとき、朝日新聞のひとつき欄に、かつての旧友が投稿してくれたことがある。これは三十九年の一月二十七日付の新聞だが、ちよつと、書き写してみる。受賞のニュースを見て投稿してくれたものである。

「……私はあの頃を思い出します。少しウエーブのかかった毛髪にクリクリした眼を輝かしながら、黒っぽい紺のセーラー服姿の

あなたが『これ第三巻、いま九巻目書いてんの』といって何のためらいもなく、渡してくださった蒙古族のこどもたちを扱った物語を。

大学ノートに書かれた長篇小説を読ませていただいたものだ。

.....

やんちや盛りの子供たちを持つ私には、あなたのような小説の真似ごとくも出来ないけれど、過ぎし日読んだ貴方の蒙古族のこどもたちへのほのかな夢を、自分のこどもたちの心にも残してやりたいような気がします」

してみると、荒唐無稽もそれなりに、夢を伝染させていたのかもしれない。
私は、コドモ心にも、それが、ニセモノの本だ、ということを知っている。

でもまあ、それでいいのだ。

べつに、ホンモノの本にしよう、という気はないのだ。

だからホンモノの小説の勉強をする気にはなれない。

私がつばら熱中してるのは、「著書」^{（二）}「こっこ」であるから、そういうのが幾冊もできていけば満足なのである。

しかし周囲はそう思わないらしくて、

「あの人は小説を書いたはる」

という神秘のベールに私は包まれていた。

昭和十九年に、繰上卒業で、樟蔭女子専門学校の国文科へ入学したから、女学校のクラスメートはなおさら、怪異のもので見送るように、四年で出ていった私を見送った。

戦前の女学校では、上級学校へゆく人が、あまりいなかった。さらに「著書」^{（二）}「こっこ」なんかに没頭している女学生はもつとなかった。

(中略)

女専の半ばで終戦になった。

女専は三年制である。

まるきり一年半は、女学校時代にひきつづき戦争中で、私は伊丹いたみにある郡是ぐんぜの精密機械の工場へ学徒動員で行かされ、そこは寮住まいだったので、またせつせと「著書ごっこ」に励んでいた。

やっぱり荒唐無稽のツクリバナシであったが、こんどは読み手が国文科の学生なので、いろいろ、注文や苦情が出たりして、もはや挿絵や装幀そうていでごまかすことはできなくなった。

自分一人「著書ごっこ」にトウスイし、ヒトにもそれを押しつける、ということはできなくなったのである。

おまけに、

「小説」

というコトバをみんな使わなくなり、

「文学」

というコトバを使うようになったから、私は、たいそうやりにくくなった。

高垣ひしがき眸ひとみや、吉屋信子なんかの作品が私はだい好きで、それらの作品に似せた作品をかいて、

「田辺聖子作」

として満悦であったのに、それらを読んで単純に、喜んでくれる友人はいなくなった。

私は、読者を失って批評家を得たのである。

入学して間なしの頃に、担任の教授が、生徒に、各自好きな作家をきかれたことがあった。漱石や鷗外、横光、などと皆はいっている。私は、

「吉川英治の『宮本武蔵』です」

となにげなく答えた。

みんなどつと笑った。

なぜ笑うのか、私には解せない。世紀のケツサクだと思いが、みんなに笑われて、頓とみに不安になり、自信が失くなった。でも私は「著書ごっこ」の中身に、漱石や鷗外に似せた小説を書こうとはかつて思ったことがない（かなり読んでいたけれど）。吉川英治のは、少年小説も、オトナの小説も、よく真似をした。

「著書ごっこ」は、自分でも、「ごっこ」か小説修行か、区別がつかないくらいだから、他人にわかるはずがなく、私は、いつも何だか小説まがいのものを書いているというので、校友会の文芸部長のようなものを押しつけられた。

「わたし、いややわ。そんなん、きらいやねん」

私は、文芸部長なんてどんな顔をしてたらいいかわからない。それに、人見知りするので、人前に出てしゃべったり、みんなの意見をまとめたり、決断したりするのはきらいである。

「むりにさしたら、泣いたるから」

といった。

「ええやないの、ややこしいことができたなら、わたしらで肩代わりするから。ともかくあんたはいつも小説書いてるし、文学趣味があるんやから適任やないの」

と国文科のクラスメートたちがいつておしつけた。

終戦後の学園は息をふき返したように活気をとり戻して、校友会のいろんな部が生まれていたが、生徒もまた、息をふき返したような子がたくさん出て来た。

活潑で、人前に出て物おじせず、集会をリードし、水に放たれた魚のようにイキイキしている。そういうのは、戦時中にはないタイプである。私は絶対にそんなタイプではない。

私はむりやりに文芸部長にならされたが、イヤでならなかった。私は「著書ごっこ」、小説ごっこをしているだけというのが、われながら思い知らされた。生徒の原稿を集めたり編集したり、などというシツカリした イ なことはにがてである。

しかし、生徒はどんどん短歌や俳句を投稿してくる。そうして、

「本はいつ出ますか」

と期待して聞きにくるのだった。仕方ない。

まだ町には印刷屋もないので、学校から原紙と紙をもらい、生徒が交代でガリ版を切った。下級生の保育科の人が、芋版で表紙のイラストを仕上げてくれて、ハカナゲなガリ版の機関誌「青い壺」はでき上った。

百五十冊刷ったが、またたくまに売れてしまった。誰もかれも読み物に飢えているらしかった。

小説がないと恰好つかない、というので私はここに「十七のころ」という短篇をのせている。これは十七歳の泉という、口数少い、おとなしい夢みがちの女の子と、俗人の代表のような両親との対比をねらった小説で、それだけのものである。われながら低調で冴えなかった。

私はやっぱり蒙古人や海賊や、古代フェニキアのドレイ（それらは「著書ごっこ」の主人公たちである）を書いている方がたのしかった。その方が文章もいきいきした。

同じツクリモノなら、現実と等身大のツクリモノよりは、荒唐無稽のツクリモノの方が、自分で書いてたのしいであろう。

文芸部のコモンの本庄先生は、まだ若い男性で、英文学をやってられたのかと思うが、地味な嘉村磯多かむらいそたなんかがお好きらしく、磯多や、横光の「紋章」などの講義が多かった。

「十七のころ」についても、コンセンツな批評をして頂いた。先生はツクリモノだと指摘して、

「若いときは、自分がよく知っていて、体験したことだけ、書く方がいいですね」

「ハア」

「身のまわりをよく見て、見ることで、モノを書く要素は。そしたらツクリバナシはかけなくなる。ホンモノを書く」

「ハア」

私はふかくうなずいたが、ほんとうは自分の体験したことなんか、書きたくなかった。

（田辺聖子『しんこ細工の猿や雉』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A トウスイ

- ① クントウを受ける
- ② 無色トウメイの液体
- ③ ケントウをたたえる
- ④ 会議でトウロンする
- ⑤ 菜食主義にケイトウする

1

B ケツサク

- ① 劇団をケツセイする
- ② ケツシュツした人物
- ③ ケツペキな性格
- ④ ケツシの覚悟で臨む
- ⑤ 凶器に付着したケツコン

2

C ドレイ

- ① あいさつをレイコウする
- ② レイコクな仕打ち
- ③ レイサイ企業で働く
- ④ 権力者にレイジュウする
- ⑤ レイセツを重んじる

3

D コモン

- ① 実力をコジする
- ② 仲間をコブする
- ③ 従業員をカイコする
- ④ 主語と述語がコオウする
- ⑤ コキヤクの満足度

4

E コンセツ

- ① コンイン届を提出する
- ② ツウコンのミス
- ③ 同窓会でコンダンする
- ④ 給食のコンダテ表
- ⑤ 田畑をカイコンする

5

問二 空欄 ・ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- ① 意図的
- ② 自動的
- ③ 抽象的
- ④ 必然的
- ⑤ 逆説的

- ① 打算的
- ② 現実的
- ③ 革新的
- ④ 芸術的
- ⑤ 普遍的

問三 傍線部 (a) 「荒唐無稽」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 言説に根拠がなく現実味に欠けること
- ② テンポよく次々と場面が展開していくこと
- ③ 外国の情緒を取り入れて表現すること
- ④ 荒々しい立ち回りを眼目としていること
- ⑤ シリアスで滑稽味に不足していること

問四 傍線部 (b) 「漱石や鷗外」とあるが、夏目漱石と森鷗外が執筆した作品を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

夏目漱石

- ① 『山月記』
- ② 『坊ちゃん』
- ③ 『暗夜行路』
- ④ 『鼻』
- ⑤ 『山椒魚』

森鷗外

- ① 『細雪』
- ② 『金閣寺』
- ③ 『人間失格』
- ④ 『浮雲』
- ⑤ 『舞姫』

問五 傍線部(二)「悦に入って説明していた」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

- ①本格的な「著書ごっこ」の楽しさに満足しながら説明していたということ。
- ②創作中の物語の世界に浸りきったまま、うわの空で説明していたということ。
- ③作家を気取る発言を自分でも恥ずかしく思いつつ説明していたということ。
- ④多くの作品を書いた優越感から、いかにも自慢げに説明していたということ。

問六 傍線部(二)「ニセモノの本」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ①読み手に夢を伝染させることはあっても、実生活においては特に役立つことのない「無益な本」だということ
- ②壮大な構想を持つ長篇小説であっても、しょせんは大学ノートに書きつけただけの「遊びの本」だということ
- ③芥川賞をとった自身の著作と比べてみると、小説としての完成度はなはだ低い「未熟な本」だということ
- ④自分独自のストーリーを装ってはいたが、実は愛読書の話の筋を意図的になぞった「模倣の本」だということ

問七 傍線部(三)「読者を失って批評家を得た」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①国文科の学生たちが「私」の小説にさまざまな意見を出した結果「私」の作風に変化が生じ、以前の作品を好む身近な読者たちが離れてしまったということ。

②「私」の小説の愛読者であった女学校の友人たちが、文学の専門的な知識を身につけていくにつれ、「私」の作品を批評的な目で見られるようになっていったということ。

③「私」が他者の作品に似せた小説を書くようになった頃から、それまで親しんでくれた身近な読者が減り、かわりに批評家に取り上げられる機会が増えたということ。

④女学校の友人たちが「私」の小説を純粹に愛読してくれたのに対し、女子専門学校の国文科の学生たちは「私」の書いた小説を厳しい批評眼でとらえたということ。

問八 傍線部(四)「むりやりに文芸部長にならされたが、イヤでならなかった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①原稿の不足を補うために、随筆や文芸批評など多彩なジャンルの文章を書かなくてはならず、それが人目に触れるのがきまり悪かったため

②他者の原稿を編集したり、原稿の印刷を行ったりといった業務も行わなくてはならず、その分、自分の小説の執筆時間が削られてしまうため

③もともと人見知りの性格であり、人前で話をすることや、他者の意見をくみ取って集団の舵取りをすることに強い抵抗感があったため

④クラスメートの一方的な押し付けが不本意であったことに加え、周囲からの助力が期待できない状況であることが前もってわかっていたため

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ① 「私」は高垣眸、吉屋信子、吉川英治らの作品に強い影響を受けたが、夏目漱石や森鷗外には興味が湧かず、その作品を熟読することはなかった。
- ② 「私」は、女学校時代の友人たちが自分の書いた作品を熱心に読み、そこに夢を感じ取ってくれていたことを当時の生活の中で強く実感していた。
- ③ 「私」は幼い頃からプロの小説家として文壇にデビューすることを夢見ており、その夢に近づくための第一歩として「著書ごっこ」を始めた。
- ④ 「私」は女学生時代に連続ものの物語を複数書いていたが、内容に混乱が生じることはなく、作品ごとに異なった話を展開していくことができた。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇〇二年に開催されたサッカーのワールドカップ韓日大会では、次のようなことがありました。一次リーグ戦日本対ロシアの試合で、日本代表チームは、一対〇でワールドカップ初の「歴史的勝利」をあげました。この試合、スタンドは日本代表チームを応援するサポーターが掲げた日の丸でいっぱいになりました。ところが、このとき掲げられた紙の日の丸の多く（二万枚）は、じつは神職者の組織が配布したものであることがあとでわかりました。「日本人としての素地」をつくるためであると神職の組織は日の丸の配布の理由を語っているということです。

また、この夜、日本の都市ではいたるところでカンキの人並みがあふれ、一部で逮捕者を出す騒動も起きました。他方、ロシアのモスクワでは、テレビで試合を観戦していたファンの一部が暴徒化して死者を出す混乱となり日本人がオソoわれる事件が起きました。ロシアでは、この試合について日露戦争を引き合いに出すコメントも登場したということです。ここには、一つのサッカー試合について、二つの国民によるナシ注二ョナリズムの感情の昂揚が読みとれるわけですが、注目すべきなのは、共同体意識の昂揚が、たんに同じゲームの規則を することによってだけでなく、テレビ中継の映像を することによって起こっている事実です。ワールドカップの場合、各国のテレビに配信されるのは世界共通の同一映像であり、実況中継の語りのみが、それぞれの国のテレビ局にユユダねられていました。

スポーツは悲劇と違ってコンテキスト・フリー（文脈自由）な象徴ゲームです。このゲームを行うために、何らかの共同体的価値（文化的価値や民族的価値）の枠組みを参加者が している必要はない。だれでもが、特定の神話や信仰を前提とせずにスポーツ競技に参加できるのです。この意味でも、スポーツは徹底的に世俗的、な象徴活動であって、「脱イデオロギー的」で、基本的に「民主的」なものだとさえ言えるでしょう。スポーツがもつこの〈世俗性〉は、スポーツが文化の差を超えてグローバル化する理由でもあります。

（注二）ギリシヤ悲劇におけるコロス（合唱隊）にも比較しうる、ファンという観衆の存在そのものが、スポーツの存在論的構造と

結びついたものであることもすでに見たとおりです。ファンという現代版クロスは、スポーツという世俗化された悲劇において、人間としての自分たちの代表である選手たちの中に、運命を招きよせる権能を帯びた「英雄」の存在を認め、それらの代表的存在と一体化します。ファンは、選手たちと文字どおり「運命共同体」として結びつくのです。こうした事態は、スポーツの普遍的な構造が可能にするものであって、ある特定の集団に固有な現象ではありません。スポーツとは、むしろそのような場かぎりの共同体の成立のメカニズムを形式化して見せているのです。ここでは、人々は現実の世界に背を向けて、ゲームを取り囲んでいる。現実の時間から離脱して、象徴ゲームの時間に身を任せている。まさに、現実の世界と時間から遠く離れて、その場かぎりでのつど完結した「共感の共同体」が、そこには生成するのです。

こうしたスポーツによる共同体の生成は、共同体の恣意化へと向かう場合もあれば、固定的な共同体の補強へと向かう場合もあります。スポーツによる共同体の恣意化とは、端的にいえば、「誰でも任意の選手やチームを応援することができる」という言い方で表現できます。どの身体と一体化するかは観る者に任されている、あらかじめ応援を強要する集団的価値などスポーツにはない、というわけです。とくに、現在のように情報化が進み、あらゆる地域の選手について詳細な情報が行き渡るようになると、こうした応援の恣意化の傾向は「イ」になります。二〇〇二年のワールドカップでも、さまざまな国の代表チームを、ときにはその代表チームのユニホームを着込み、その国の旗を振ったりして応援する日本の観客の姿が見られました。こうした現象は、恣意化を示す例です。

他方で、スポーツによる「共感の共同体」の生成を、固定的な共同体の確認と補強へと結びつけていこうとする傾向が根強くあります。オリンピックやワールドカップのようなスポーツの世界大会は、現在までのところ、国民国家を基本単位としてチームが編成されています。試合のさいに行われる国旗掲揚や国歌斉唱、選手のユニホームに縫い込まれた国旗やナショナル・シンボル、応援に振られる旗、テレビ・ラジオで国内向けに放送されるナショナルな語り、報道における自国選手の扱い……。スポーツによる共感の共同体が、国民国家という政治的共同体とびつたり重なり合うように、スポーツ・イヴェントは制度設計されているのです。

国威発揚としてのスポーツという二〇世紀が生み出した図式は、スポーツ文化のあらゆる領域を現在でも覆っています。この図式が増幅されたときに何が起こったかは二〇世紀の歴史がよく教えているところです。「民族の祭典」と呼ばれたナチスによるベルリン・オリンピックや、ムッソリーニのイタリアが組織したイタリア・ワールドカップ、あるいはまた、旧ソビエト連邦をはじめとする全体主義体制下のスポーツを思い起こしてみましよう。

しかし、スポーツによる共感の共同体と、国民国家の政治的共同体とを直接結びつける図式は、スポーツの内在的な論理にとつては、必然的なものでも、超歴史的なものでもないのです。それはむしろ歴史的な偶然、あるいは、いまや乗り越えられようとしている歴史的段階とでもいべきものなのです。例えば、ナショナル・チームを応援して日の丸を振ったからといって、その人は運命共同体としての日本という政治的価値を無条件に受け入れているのでしょうか。繰り返しますが、彼がスタジアムでゲームを観戦していたときには、現実の世界に背を向け、現実社会の時間から離脱して、監督のトルシエの指揮や、選手の中田や稲本のプレーを応援していたはずです。たしかに、そこで振られていたのは日の丸だけでも、それは一面ブルーのユニホームを着た応援団の中の〈共感の共同体〉の記号であつて、右翼の人たちのいう天皇制国家の記号ではなかったはずと。ところが、そこに配られていたのが「日本人としての素地」をつくるために神職の組織が配布したものであつたとすると……。ナショナル・シンボルを使用することで、スポーツ・イヴェントによつて生成したその場かぎりの〈共感の共同体〉を、国家の方へとすくい取ろうとする政治的詐術が、そこにはあります。スポーツを政治利用しようとする国家の象徴政治に、まったく無防備なまま差しだされているというのが、現在のスポーツと国家との関係なのです。

スポーツの共感の共同体が、国民国家の政治共同体に変容をもたらすということもときに起こります。一九九八年、ワールドカップのフランス大会に優勝したフランス代表チームには、司令塔のジダンがアルジェリア移民の二世であつたのをはじめ、バスク人、アルメニア人、マルチニク人も含まれていました。フランスが優勝した夜、パリでは一〇〇万人の市民たちが繰り出して、ガイゼンモンにはジダンの肖像が映しだされ、「ジダンを大統領に」が合いことばのように人々の口にのぼりました。国民

国家の政治共同体とスポーツの共感の共同体との関係が ウ 瞬間でした。

二〇〇二年の韓日大会においても、日本代表チームの髪の色はどうだったでしょう。金髪に染めた者もあれば、茶髪もあり、赤い髪で話題になった選手もいました。そして、サントスのようなブラジル人の選手ばかりでなく、監督や通訳はフランス人。こうした文化的多様性の光景は、日の丸・君が代の国家シンボルがさし示す全体主義的な規律や単調さとはうらはらに、自由な個人のイメージを強調して見せたのではないのでしょうか。日本代表チームの監督を務めたフランス人のフローラン・ダバディは、サッカーにおいてナショナル・チームが世界大会の「代表」である時代はもうすぐ終わるだろうと発言しています。選手が代表チームへの帰属を恣意的かつ自由に選ぶようになり、さらに観客が自分たちの応援するチームとの結びつきを自由に選ぶようになったとき、スポーツが国民国家という政治共同体にホウシする^Fような時代は終わることになるのかもしれない。

(石田英敬『記号の知／メディアの知』による)

(注一) ナショナリズム

∴ 国家主義や民族主義と訳される。一般的に自己の属する共同体の発展や独立を強調する思想、運動。

(注二) ギリシヤ悲劇(悲劇)

∴ 古代ギリシヤで紀元前五世紀頃に演じられた演劇。主に運命に流される人間像を描く。

問一 傍線部 A・B・C・D・E と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A カンキ

- ① 母の言動にカン_キプクする
- ② 名刺をコウカン_キする
- ③ 私のカン_キチするところではない
- ④ 客としてカン_キタイされる
- ⑤ 式をカン_キリヤクカする

16

B オソ_ワれる

- ① 歌舞伎役者が先代の名をシユウ_ワメイする
- ② ケーキを食べるのがシユウ_ワカンになる
- ③ カクシユウ_ワでアルバイトに通う
- ④ 用意シユウ_ワトウで臨む
- ⑤ 日曜はシユウ_ワジツ、ゲームをして過_ワこす

17

C ユダ_ネられて

- ① クラスで代表イ_ダインを務める
- ② 父も母も職業はイ_ダシである
- ③ 健康をイ_ダジする
- ④ 敵の軍勢をホウ_ダイする
- ⑤ 祖母のイ_ダサンを受け取る

18

D ガイセンモン

- ① その案件は市長のセンケツ事項だ
- ② A氏の登場は文壇にセンブウを巻き起こした
- ③ 強豪チームを前にしてセンイソウシツする
- ④ 妹の趣味はセンリュウを詠むことだ
- ⑤ 家族旅行でユウランセンに初めて乗った

19

E ホウシ

- ① 人気のない彼はホウマツ候補と呼ばれる
- ② 友人に外国小説のホウヤクを頼まれる
- ③ 鎌倉時代の武士は主君にホウコウをした
- ④ 罪はつぐなつたのでムザイホウメンだ
- ⑤ ホウレイに従って確実な業務を行う

20

問二 空欄

ア

イ

ウ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① 共栄
- ② 共存
- ③ 共謀
- ④ 共有
- ⑤ 共感

21

イ

- ① 決定的
- ② ルール
- ③ 微減
- ④ 頭打ち
- ⑤ 顕著

22

ウ

- ① 固定化した
- ② 逆転した
- ③ 流動した
- ④ 恣意化した
- ⑤ 無秩序化した

23

問三 傍線部(a)・(b)の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

(a) 引き合いに出す

① 確証のない噂話のネタにすること

② 話し相手に自慢すること

③ 話し相手を挑発するような嘘をつくこと

④ 人を愉快にさせるための冗談をいうこと

⑤ 話の参考にするために例をあげること

24

(b) 権能

① あることについてそれを恐れずに挑戦する勇氣

② あることについて焦らずに悠々と対処できる自制心

③ あることについてそれをすることのできる資格や権利

④ あることについて柔軟に対処することのできる応用力

⑤ あることについて迷わずに正しいことが何かを見極める知

25

問四 傍線部(一)「ここ」とは具体的に何を指しているか。最も適当なものを次の①～④の中から一つ選ぶ。

① 運命共同体

② ある特定の集団

③ ファン

④ スポーツ

26

問五 傍線部(二)「〈共感の共同体〉」について、本文に即して正しく説明しているものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 〈共感の共同体〉は、スポーツ以外の、例えば音楽イベントでも発生する。
- ② 〈共感の共同体〉は、人類の歴史が始まって以来いつも存在し続けてきた。
- ③ 〈共感の共同体〉は、必ずしもつねに国民国家と結びつくとは限らない。
- ④ 〈共感の共同体〉は、日の丸など国旗を振ることをきっかけに生成する。

27

問六 傍線部(三)「国民国家という政治的共同体とびつたり重なり合うように、スポーツ・イヴェントは制度設計されている」とあるが、「制度設計」の具体的な例として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 国際試合の際に両チームが所属する国の国歌を歌うこと
- ② 競技場の看板に多国籍企業の商品が広告されていること
- ③ テレビ中継などでは主に自国選手の活躍が語られること
- ④ 選手たちのユニホームには国旗が縫い込まれていること

28

問七 傍線部(四)「文化的多様性の光景」とは、どのような光景か。次の①～④の中から最も適当なものを一つ選べ。

- ①日の丸の旗を振る大勢の観客でスタジアムが満たされる光景
- ②様々な髪の色をした選手たちがスタジアムで躍動する光景
- ③日本出身のチームスタッフが日本代表チームで活躍する光景
- ④自国の国歌を選手とコーチ陣と観客がみなでそろって歌う光景

29

問八 本文の内容と一致するものはどれか。次の①～④の中から最も適当なものを一つ選べ。

- ①選手の代表的存在に一体化しようとする現代のファンはギリシヤ悲劇におけるクロスと比較しようということ
- ②ナチスによるベルリン・オリンピックなどには現代のスポーツではけして見られない魅力があったということ
- ③「日本人としての素地」を作ろうとして国旗を配布する神職の組織の取り組みはとても大切であるということ
- ④各民族の優れた選手を集めたフランスチームが九八年のワールドカップで優勝したのは当然だったということ

30